

万延元年のディプロマティック・ギフト

＜静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 松島 仁 教授＞

Diplomatic Gifts—「外交的贈答品」とでも訳したらいいだろうか。馴染み深いところでいえば、1972年国交正常化の折に中国から贈られたパンダがそれに当たろう。国家間の外交を円滑にするツールとしての贈答品である。それはパンダのように友好関係の構築に用いられることもあれば、覇権を争うための文化的な“武器”として使われることもあった。

そうしたディプロマティック・ギフトに関する研究は、近年欧米において高まりをみせているが、筆者が専門とする日本美術史、とりわけ近世絵画史においては、榊原悟氏の名著『美の架け橋』を除き、余り聞かない。江戸時代の鎖国史観については、ロナルド・トビ氏の『近世日本の国家形成と外交』（川勝平太氏ほか訳）このかた再考されつつあるが、その影響もあるのだろう。

こうしたなか最近、幕末期の徳川日本から欧米へ贈られた絵画が陸続と発見されている。前掲書において榊原氏は1857年に蒸気船贈答への返礼として蘭国王ウィレム三世へ贈った屏風群（ライデン国立民族学博物館蔵）の存在を明らかにしているし、1860年英女王ヴィクトリアに贈られた「富士三保松原図屏風」（ロイヤル・コレクション・トラスト蔵）の再発見も記憶に新しい。一昨年には三浦篤氏ほかの調査団が1862年遣欧使節より仏皇帝ナポレオン三世へ献呈された掛幅十幅をフォンテーヌブロー宮殿において確認し話題となった。それにともないエルミタージュ美術館にある十幅も、遣欧使節から露皇帝アレクサンドル二世に贈られたものと同定された。その驥尾に付し筆者も、デュッセルドルフ郊外ランゲン財団所蔵の「四季山水花鳥図」について、フォンテーヌブロー宮殿・エルミタージュ美術館両本と図様・様式・法量・筆者を共通させていることから、遣欧使節持参の掛幅（恐らく普国王ヴィルヘルム一世への贈答品か）のうちの四幅と位置づけた。

そしてこのほどセンターの所蔵する狩野董川中信筆「富士飛鶴図」が、万延元年（1860）日米修好通商条約批准書交換のためワシントンへ派遣された遣米使節が大統領ジェームズ・ブキャナンへ贈答した掛幅のひとつであることが、幕末期の外交史料と照合した結果、判明した。詳しくは『國華』1529号掲載の拙稿で述べるが、『続通信全覧』（外務省外交史料館蔵）にこと細かに記載される掛幅の内容と本作が完全に一致するのである。

日本の近代史・外交史の黎明を飾った富士山絵画が150年余の星霜を経て、富士山を最も美しく望めるギャラリーに出現したのである。

同作については、来春2日間東京で展示したのち、来年度の特別展で改めて紹介する予定である。皆さんの眼で歴史のダイナミズムをご確認いただきたい。



狩野董川中信筆 富士飛鶴図
静岡県富士山世界遺産センター蔵

